
翠惺

水無月レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翠惺

【Nコード】

N0913X

【作者名】

水無月レイ

【あらすじ】

400年前ー

江戸時代・・・春の京都・・・

陰陽師と姫・・・

そして、現代にわたる妖怪の争い・・・・・・・・・・

「清・・・明・・・様・・・・・・・・清明・・・・・・・・さま」

「私はお前のために戦う・・・。」

誰よりも守りたい・・・この気持ち・・・

「大好きです・・・」

第一幕「春の香りと、冬の闇・・・」

400年前・・・

江戸時代・・・春の京都・・・

桜印の名家・・・

「清明様・・・今日も、桜が美しいですね。」

「そうだな・・・。ひなせ燈？ 惺・・・」

私は、燈？ 惺、京都の姫・・・。

清明様は、妖怪を払う陰陽師で「桜印清明」・・・。

清明様はほんとうにお優しい・・・。

時は過ぎ・・・冬になった・・・

京都の奥底の暗い闇の中・・・

「桜印のやつらを・・・叩きのめすときが来た・・・。」

「われら妖怪の時代だ・・・。」

「これからが、われらの時代だ・・・。

行くがよい・・・妖怪たちよ・・・。
桜印家のものはすべて皆殺しにしろ！」

「ははー炎舞様。」

炎舞はにやりと、わらった・・・。

妖怪たちが炎舞とやらに、おじぎをし・・・

京都の町へ出た・・・。

その頃、清明たちは・・・。

「清明様・・・どうするのですか・・・。」

と一人の陰陽師が清明に焦りながらいった・・・。

「清明様・・・。」

燈？惺は清明を見つめた・・・。

「どうするんだ！！西のほうから妖怪が攻めてきてる
そうじゃないかっ！！」

もう一人の活発の口うるさい方の陰陽師は

清明に文句をいう・・・。

清明なにも、言わない・・・。

「くそっ！、どうすれば、・・・。」

その部屋にいる、陰陽師ほとんどが、手を握り締めて、
唇をかんだ・・・。

そうすると、清明がいった・・・。

「やつらを、倒す・・・。」

清明は、決心をした。

「倒すって・・・分かっていいのか・・・清明！

相手は百鬼いるぐらいなんだぞ！！いや・・・もっというかもしれ
ないのに・・・

何を言うんだ・・・！」

「では、このまま見ているというのかっ！」

清明のそのときの顔は、少しこわかった・・・。

それに圧倒されたほかの陰陽師は清明に従うことになった・・・。

妖怪たちは、今日の夜にせめて来るらしいのだ・・・。

そして、時間は流れ、夕日がでて、向こう側の空からは
月がうすくみえてきた・・・。

「清明様っ！」

燈？惺が総会の部屋で一人になった清明にはなしかけた。

「危険です。おやめください・・・！」

清明はなににもいわない・・・。

「清明様・・・ダメです・・・。」

燈？ 惺は少し涙目になっていた。

「燈？ 惺・・・私はお前のために戦う・・・。」

私が勝てないとおもってるのか・・・？

清明がやつと口を開いた・・・。

「そうではありません・・・。私は・・・。」

「燈？ 惺・・・私はお前が好きだ・・・。だれよりも好きでいたいと

願っている。だから、お前、燈？ 惺を守りたい・・・。」

好きだから・・・。」

清明は燈？ 惺に行った・・・。

「清明様・・・うつ・・・。」

私はいきなり目がくらんだ・・・。薬か何かでくちを抑えられた・・・。

「清明様・・・。」

「ごめんな・・・。燈？ 惺・・・。」

第二幕「白い闇」

目を開けると、暗闇の中だった……。

「ここはどこだろうか」

私は、一人牢獄の中にいた……。

「晴明様……っ……ここは……」

私は、白い着物をきたまま、牢獄の中にいた。

周りには、飢えて死にそうな囚人が壁に横たわっていて、
私がいることに気付きもしないぐらいだった……。

「早くここからでないと……。」

牢の外は、やけに騒いでいて、その音が牢に響いていた。

「私は何でこんなところに……。早くでないと晴明様が……。
っ」

私は不安のあまり一晩眠りについてしまった……。

……なにがおきたかも……知らずに……

起きたときは朝になっていた……。

囚人たちは、昨日と変わらず壁に横たわっていた……。

私が牢からでようとしたその時、向こうの階段から足音が聞こえて
きた……。

「詰まらんな……この世は……」

……だ、だれなの……

私はこつそと、壁の方から、階段の方をみつめた……。

「ん……？」

目があってしまったような気がした……。

声の感じからすると、男のようだ……。

しかし、男の周りにもたくさんの方がいるようだ……。

どンドン、牢の方に近づいてくる……。

私はとにかく焦った……。きつと様子からみると、晴明様が言って

いた

妖怪の百鬼であろう・・・。

・・・どうすれば・・・

ドサッ

そのとき私は誰かに押し倒された・・・。

えっ・・・。

「何だ、囚人か・・・詰まらん、殺せ。」

男は隣にいた側近に命じた。

そうすると、側近は弓を取り出し、囚人の背をめがけて矢をはなつた・・・。

矢を放った後、男たちはそこから去った・・・。

けれど、その男は明らかにわたしにきづいていた・・・。

男は最後に、私を見つめて「またあおうぞ・・・。」といって、行った。

「大丈夫でございましたか・・・。」

矢を打たれた囚人は私を守ってくれたのだ。

「なぜ・・・私を・・・」

私は何故自分が助かってしまったのだろうと思わずにはいられなかった・・・。

「あなた様は私たちが罪を犯しても、大切にしてください・・・た・・・そのご恩を・・・今お返しできて・・・ほんとうに・・・・・・よか・・・つた・・・。」

囚人は目をつぶったまま、二度とあけることはなかった・・・。

私は目の前で一人の間人を、消してしまった・・・。

私は何とかして牢をでることができた。

一段一段地上への階段を登っていった・・・。

あたりは一面真っ白で、私以外に誰もいなかった・・。

私は、真っ白雪の上を走った。

少し進んだところに、兵がいた。

「あの・・いったいどうしたのですか・・。

・・。えっ・・。いやっ・・。」

その兵は死んでいた・・。

その向こう側をみると、雪の上は赤く染まっていて、兵が何人も倒れていた・・。

「晴明様っ・・。」

私は、すべての場所を探し続けた・・。

すべての場所を・・。

最後に行った場所・・。桜の木の場所・・。二人の場所・・。

「・・。はあ・・。はあ・・。」

私は走り疲れて息切れがひどかった・・。

私は立ち止まった・・。

「・・。晴明・・。様・・。晴明様・・っ!!」

私は白く染まった桜の木に横たわる晴明に駆け寄った・・。

第三幕「別れ」

「清明様っ！……」

私は清明のそばに駆け寄った……。

「燈蝶惺……か……」

「そ、そうです……」

私は感情を抑えることが出来なかった……。

目の前にいる傷だらけの彼があまりに悲しすぎた……。

涙が出てきた……。

「燈蝶惺、何故泣いているのだ……」

「清明様なぜこんなになるまで……、わたし……なんか……」

「そんな顔をしないでくれ……、私はお前のために戦うことができ……て……」

うれしいよ……」

「私も……です……」

「燈蝶惺、思い出を大切にしてく……れ……。この桜は私たちの大切な場所だ……」

燈蝶惺……」

「はい……清明……様……」

「愛して……いる……」

「私も……です……」

彼は二度と目を開けなかった……。
何度、何度、呼びかけても……。

私は叫び続けた……。何度も何度も泣き続けた。本当に大好きだった……。優しくては、あつたかくて、守ってくれて、たくさん愛してくれた……。かけがえのない存在……。

「晴明様……。私も愛しています……。誰よりも大好きです……。」

私は彼のそばにずっといた……。

今私がみている桜は、真つ白な悲しい桜……。

私は何日かたって、たくさんの兵を埋めた……。

残っている兵は、ひとりとして、いなかった……。

桜印家は消えてしまった……。

残ったのは、桜と私だけ……。二人で過ごしたすべてのものが消えてしまった……。

5日たったある日の夜……。私は桜のある場所を眺めていた……。

私は何が起こってしまうのかも、わかっていなかった……。

グサッ……。

何かが私の胸につきささった……。

「……えっ……。」

背後で誰かがニヤリと笑った……。

私は、そのまま倒れた……。

「晴明……。さ……。ま……。」

バ
タ
ッ
・
・
・

第四幕「時の流れ」

「ここは、私は矢で刺された．．．はずじゃ．．．」

そこはいつもの桜の木だった．．。清明との思い出の場所．．。しかし季節は、夏．．．。

「私がいた桜の木は、たしか．．冬．．。」
ガザ．．ガサツ．．

向こうの草村の方から、誰かがやってくる音がきこえる．

燈蝶惶は、急いで隠れようとしたが、間に合わなかった．．。

「あっ．．．」

「．．．．．」

私はやってきた人の姿に驚いた．．。

清明にそっくりな男の人だった．．。

私は嬉しくて、悲しくて、切なくて、こんなにも愛しているか、実感を感じた。どんなに大切だったか．．．。

「大．．丈夫．．か．．．？」

その男の人は、とても心配している顔と声で私のそばに近づいてきた．．。

私は涙が止めることが出来なかった．．。

私は思わずにはいられなかった．．。

私は手を差し伸べる彼に、抱きついた……

「晴明様……」

俺は引きつけられるように、桜の木のところへ……
いつも見に行っているが、今日はちがう……。
本当にだれかが呼んでるような気がした……。

俺はその日の夜に桜の木のもとへ行った。

行ってみると、誰かが桜の木の下に座っている……。
銀髪で、色鮮やかな着物を着ていて、とても美しい……。
俺は目を奪われた……。

彼女は俺の顔をみると、何故か涙を流している。
声をかけると、彼女は悲しい顔をする……。

手をのばすと、彼女は抱きついてこういった……。
「晴明様……」と……。

第五幕「はじまり」

燈縹惺は強く強く彼を抱きしめた・・・。

燈縹惺「清明様・・・。」

燈縹惺は男の顔を見上げた。

男「・・・。」

燈縹惺「はっ・・・・・・・・あなたは・・・。」

燈縹惺は気づいた・・・。男が清明ではないことに・・・。
バタッ！

燈縹惺は倒れてしまった。

男「お、おいっ！」

男はとつさに倒れてくる彼女を支えた・・・。

燈縹惺（あなたは・・・誰なの・・・。）

時とは、流れゆくもの・・・

けっして、変えることのできないもの・・・

誰にでも、一人では支えきれない思いがある・・・

悲しみや切なさや愛・・・。

どうすることもできない死・・・

（会いたい・・・。会いたいです・・・。清明様・・・。）

燈縹「ん・・・・・・・・ここは・・・・・・・・？」

？「ここは、神社。桜印神社だ・・・。」

燈縹「あなたは・・・。」

燈縹の目の前にたっていたのは、さっきの清明に似た男であつた・・・。

ひのえ すい

男「俺は、緋乃柄 翠・・・。お前は誰だよ。なんで

俺の家の桜のところに」

ひなせ

燈縹「私は燈縹・・・です。いったいここは・・・。

清明様はどうして・・・。」

翠「清明って、いつの時代の話だよ・・・。」

燈縹「えっ・・・・・・・・。」

燈縹は彼の言ったことに、驚いた。

彼も燈縹を見てびっくりしている・・・。

確かに、きれいな着物を着ていて、銀髪の長い髪・・・。

まるで、江戸時代の絵巻から出てきたような・・・。美しい姿・・・。

燈縹惺「ここは江戸ではないのですか・・・？」

翠「江戸って・・・ここは平成だけど・・・」

（コイツ、なに言ってるんだ・・・）

燈縹惺「へ、平成とは・・・なんで・・・」

燈縹惺は本当に驚いた。ここはきつと江戸ではない時代

なのだ・・・もし、江戸であれば燈縹惺は矢で打たれて死んでいた・・・。

翠「とにかく、何なんだ・・・お前は・・・」

燈縹惺「私は・・・」

燈縹惺は翠に自分の起きたことを、全て話した・・・。

理解されないかもしれない・・・けれどわかってほしかった。

自分の気持ちを・・・

暗い闇の中・・・妖怪たちは今もうごめいている。

？「フツ・・・。。。。。。やっとなたか、燈縹惺・・・手に入れてみせるぞ・・・。。。。。。」

この世とともに・・・」

桜の光とともに、闇も動き出す・・・。

翠惺のように・・・。。。。。。

第六幕「破滅への入り口」

翠「妖怪に．．．．妖怪にやられたのか。晴明ってやつは．．．」

燈蝶唄「．．．私が来たときは、晴明様は．．．。」

翠「じじいからは、晴明は妖怪に滅ぼされたって聞いたが、．．

本当だったとは．．．」

燈蝶唄「信じてくださるのですか．．．？」

翠「ああ、妖怪はまだたくさんいる．．。」

（妖怪．．あいつがいるかもしれない．．。）

翠と燈蝶唄は、自分のあった出来事話した．．。何もかもを．．。

時とは、理不尽なもので私たちの中にあり続ける。

翠「お前行くところないんだろ。しょうがないから、ここにいろよ．．。」

翠はまじめな顔で私を見つめて言った．．。

燈蝶唄「えっ．．いいの．．ですか．．．？」

燈蝶唄は、翠に感謝しきれないほどの気持ちになって言った。

自分はなにも出来ないけれど……

翠（……燈縹惺か……どっかで聞いたことがある……ような……）

燈縹惺（清明様にほんと似ている……。でも……）

「本当にありがとうございます。翠様。」

燈縹惺は翠に笑いかけた……。今はそれくらいしかできないのだから……。

翠「あのさ……様はいいから、翠でいい……。」

燈縹惺「あつえつと……すみません。

では……す、翠……。」

そのとき、翠は少し頬が赤くなっていた……。

翠「あと……あとさ……。」

燈縹惺「はっはい……なんでしょうか。」

燈縹惺は少し驚いた表情で聞き返した……。

翠「その敬語……やめてくれない……。調子狂うからさ……。」

翠は少し小さな声で言った……。

燈縹惺「すみません……。なれるまで時間がかかりますので……
本当に……すみません。」

翠「じゃあ、適当なところで寝ていいから。」

燈縹「は、はい……。」

燈縹は思っていた……。

あんなにも晴明はつめたかったか……

自分の無力感……ほんとはもっとやさしくしてほしかった……。

燈縹（……ほんとは、泣きたい……だって愛しい人を

無くしてしまったのだから……。）

燈縹は用意してもらった布団に入り、昔のことを考えた……。

燈縹「晴明様……会いたい……。」

ポロ……

彼女はひとしずくの涙とともに、眠りについた

ピヨッピヨッ

燈縹「ん……。」

鳥のさえずりとともに、太陽の光が部屋に差し込む……

燈縹（もう朝……）「はあ……。」

彼女は深くため息をついた……。

グキュー……

燈縹惺「おなかすいちゃったなあ・・・」

燈縹惺は布団をたたむと、ふすま障子を開けて、廊下へと出て行った。

燈縹惺（ずいぶん大きなお屋敷・・・でも・・・本当に

桜印家にそっくり・・・）

燈縹惺「んっ・・・？いい香り・・・。」

廊下の向こうから、とてもいい匂いのご飯の香りがしていた・・・。
燈縹惺はその匂いを辿って匂いのする部屋の前で止まった・・・。

燈縹惺「ここ・・・かな・・・」

燈縹惺は息をのんでふすま障子に手をかけた・・・。

スウー

燈縹惺は静かにあけると・・・

そこには二人分の日本風で豪華な料理が、並べられていた・・・。

燈縹惺「おいしそう・・・。」

奥の台所では誰がいる・・・。

燈縹惺はこっそりその台所をのぞくと、翠が味噌汁を作っていた。

翠「何だ・・・お前か・・・そこに料理があるから食べ・・・。」

燈縹惺「あっ・・・はい・・・。」

燈縹惺は翠のエプロン姿に少し赤くなってしまった・・・。

燈縹「私、なんで赤くなっただろう……。でもほんと晴明様に似ている……」

燈縹は席に着くと、自分用に並べられた、ご飯に目を輝かせた・。

翠「何、ながめてんの……。早く食べよ。洗い物もしなきゃ

いけないだからよ……」

燈縹「あつはい……。頂きます……」

燈縹はにつこりほえんで、おいしそうに翠の作ったご飯を食べた。

（そんなにおいしいのかよ……）

翠は少し照れた顔で燈縹が食べ終わるのを待っていた……。

洗い物し終わり、翠は着替えをして、玄関に出た……。

翠「俺、学校に行ってくるから、お前はさっきの部屋で待ってるよ。」

燈縹「あの、学校とは……」

翠「あの昔で言う寺子屋みたいなもん……」

燈縹「……そうですか……。わかりました……。

待っております……。」

燈縹惺は少し悲しい顔をして、翠を見送った。
翠その燈縹惺の顔を見て・・・言った。

翠「なるべく早く帰って来るから・・・」
それなりに、翠の気遣いなのだろう。

燈縹惺「はい・・・。」

燈縹惺は自分の部屋に戻り、また眠ることにした。

暗い闇の中でも・・・

？「我が、君主・・・なにようでございましょう。」

？「あの姫をつれてこい・・・なるべく怪我をさせないように・・・
手荒なまねをしたら・・・わかつているな。」

その君主は、手元にある鏡の中の女性を指差した。

？「はっ！ おうせのままに」

その妖怪はすぐにその場を立ち去った。

？「今、迎えに行くからな・・・燈縹惺・・・」

新たな闇が動き始める・・・。

その世は、破滅へとつながっていく・・・。

第七幕「翠」

翠「あいつ・・・大丈夫かな・・・」

翠は授業中にも関わらず、家にいる燈縹惺を、心配した。

先生「おいっ！緋乃柄。授業をちゃんと聞かんか。

いくらテストで100点でもな・・・」

先生は参った顔で翠を注意した・・・。

朝が過ぎ、昼が過ぎ、帰る時間帯になった・・・。

翠はちょうど学校の仕事ができしまい・・・遅くなってしまうた。

翠「はあ、はあ、なんでこんな時に・・・」

その頃家では・・・

燈縹惺「ん・・・ふうあ・・・

もうこんな時間になってしまいました・・・。

翠様は・・・」

？「姫・・・見つけたぞ・・・」

燈縹惺「えっ・・・誰・・・」

庭の方から声が聞こえた・・・。

燈縹惺は立ち上がり、庭の方を見つめた。
後ろに気配を感じ振り向くと・・・

燈縹惺「きゃっ！」

後ろから腕を捕まれた。

？「本当に美しい・・・。手荒なまねはしない方が身のためですよ。」

燈縹惺「あ、あなたは、妖怪・・・」

？「我ら、君主の願いでお迎えに上がりましたぞ。」

燈縹惺「イヤッ！」（助けてっ！晴明様っ！）

ブサッ！

？「うわああー」

燈縹惺「刀・・・？」

妖怪の腕に刀が刺さっていた・・・。

燈縹惺はそのすきに、妖怪のそばを離れた・・・。

刀が投げられた法をみると、

そこには、翠が立っていた。

燈縹惺「翠様っ！」

翠「人の家に勝手に上がり込むんじゃないねえ・・・。

お前大丈夫か・・・。」

燈縹惺「あっはい・・・。」

？「クソがつ・・・人間の分際で、手をあげるとは、

食おうてやる・・・。んっ・・・お前人間ではないな・・・。」

燈蝶唄「えっ・・・」（翠様は人間では・・・）

翠「そっだ・・・。俺は妖怪。翠緑の妖怪・・・。緋乃柄　翠だ!!」

時の歯車が回り出すとき・・・
二人の思いがすれ違う・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0913x/>

翠惺

2011年11月28日00時52分発行